



Title	朝鮮初級学校に通う低学年児童の朝鮮語習得過程 : ストーリーテリングを用いた検討
Author(s)	玄, 純美; 麦谷, 綾子
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究. 2025, 21, p. 81-93
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102061
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《研究ノート》

朝鮮初級学校に通う低学年児童の朝鮮語習得過程

— ストーリーテリングを用いた検討 —

玄 純美（朝鮮大学校）

hyon_s@korea-u.ac.jp

麦谷 綾子（日本女子大学）

mugitanir@fc.jwu.ac.jp

The Language Acquisition Process of Korean Elementary School Grades 1-3:

An Investigation Using Storytelling

Sunmi HYON & Ryoko MUGITANI

要 旨

本研究では、日本語を第一言語とし朝鮮初級学校（小学校に相当する）にて朝鮮語を学んでいる児童の朝鮮語習得過程を、量的かつ客観的に調べることを目的として、ストーリーテリングの手法を用いて発話データを収集した。調査1では初級学校1・2・3学年児童（47名）を対象とした学年横断的な調査を、調査2では初級学校2学年児童（14名）を対象とした縦断的な調査を実施した。発話データから算出した朝鮮語産出量・朝鮮語語彙数・朝鮮語比率・朝鮮語付属語数を分析した結果、2学年の終わり頃から日常会話の大部分を朝鮮語が占めるようになることが示唆され、朝鮮語の語彙数や付属語の使用が漸次的に増加する様子が示された。また、朝鮮語付属語について使用者率に基づいた分析を行なったところ、本研究の参加児童が早期に習得したと考えられる11種類の付属語が示された。

Abstract

The purpose of this study is to quantitatively and objectively examine the process of acquiring Korean among Japanese native-speaking children who are enrolled in a Korean elementary school in Japan. Speech data were collected using a storytelling task. Study 1 is a cross-sectional study involving 47 elementary school students in grades 1, 2, and 3. Survey 2 is a longitudinal study that tracks 14 second grade students. Analysis of the speech data, including the amount of Korean produced, the number of Korean vocabulary items, the proportion of Korean words, and the number of Korean grammatical markers, indicated that by the end of second grade, students were able to produce the majority of their speech in Korean. The results also showed a gradual increase in Korean vocabulary and the use of grammatical markers. In addition, an analysis of grammatical marker acquisition identified 11 markers that were acquired early.

キーワード：朝鮮学校、朝鮮語習得、第二言語習得、ストーリーテリング、量的研究

1. はじめに

1.1 朝鮮学校児童の言語使用

朝鮮学校とは日本各地に設立された在日朝鮮人子女が通う学校で、幼稚班・初級学校・中級学校・高級学校・大学が運営されている。これはそれぞれが日本の幼稚園・小学校・中学校・高等学校・大学に相当する。現在の児童・生徒・学生は日本で生まれ育った4世と5世の子女が中心となっており、教員もほとんどが朝鮮学校の出身者である。宋（2006）や李（2024）が述べているように、親族の名称や挨拶、朝鮮の文化に関する言葉など一部の言葉を除いて、家庭で使用する言語は大抵の場合日本語である。李（2024）が朝鮮幼稚班の保護者を対象に行った調査では、家庭での朝鮮語¹⁾使用について「全く使用しない」もしくは「ほとんど日本語を使用する」と回答した保護者が69.2%、「どちらかという日本語を多く使用する」と回答した保護者が27%であり、日本語が第一言語である家庭が大多数を占めている。児童たちは朝鮮学校の幼稚班もしくは初級学校に就学した後から朝鮮語を本格的に習得しはじめ、学校とその周辺コミュニティでは朝鮮語を話すようになる。朝鮮学校では「日本語」科目のみ日本語で授業を行い、「国語（朝鮮語）」をはじめとする算数、理科、社会などのほとんどの科目を朝鮮語で教えている。授業以外にも課外活動やクラブ活動を含む学校生活全般を朝鮮語で過ごしている。

1.2 先行研究

朝鮮学校の教育形態は、イマージョン教育の視点から注目されてきた。朝鮮学校の言語教育について湯川（2003）は、「日本の地で、マジョリティ言語である日本語を第1言語とする子どもを集め、朝鮮語をほぼゼロの状態から学校で育てる、典型的なイマージョン教育である」（湯川, 2003, p.13）と述べている。湯川（2003）は朝鮮学校の幼稚班期にどのようなイマージョン教育が行われているか、どのようなスピード・順序で園児が朝鮮語を習得するのかに焦点を当て不参与観察（時には参与観察）を行った。この研究では、生活のルーティーンの中で朝鮮語の意味を解し、頻繁に聞く表現やルーティーンに含まれる表現から産出し始めた後、2年目には朝鮮語の句や節の中の言語要素を分析的にとらえて文法的に正しい知識を積み上げていき、3年目になれば、日常の自分の経験をかなり自由に表現できるようになることが報告された。柳（2009）は朝鮮初級学校1学年の指導法について、日常に即した教科書を用いて実用的な口語表現を多くインプットする方法が取り入れられていることや、日本語の助けを借りて理解を優先し、同時に言語形式にも意識を向ける指導法であることなどを指摘した。授業観察とインタビューを行った金（2009）は、発音指導を初級部低学年に集中的に実施し1年後には読む能力をほぼ完成させ、書く能力は4学年の時に完成させること、会話については初級部低学年では基本的な会話は可能であると報告した。これらの研究は、朝鮮学校の言語教育について調べた数少ない研究である。しかし、研究手法として主に観察とインタビューに基づく質的な解析に留まり、児童の朝鮮語能力について言語課題を用いて客観的・定量的に検証した研究はこれまでのところ見当たらない。

日本におけるバイリンガル教育に関する研究は、主に日本語と英語の組み合わせで行われてきた。イマージョン方式を取り入れた日英バイリンガル教育の取り組みとして、加藤学園（静岡県沼津市）やぐんま国際アカデミー（群馬県太田市）、New International School（東京都豊島区）などが設立さ

れ様々な報告がなされている（中島, 2006; 山口他, 2013; 湯本, 2003）。また、学習指導要領の改訂により小学3年生から外国語活動が導入されるなど、日本における英語教育に対する関心は非常に高く、英語教育に関する知見も蓄積されている（江口, 2020; 長谷川, 2013; 本田他, 2020; 笹原他, 2012）。しかし、バイリンガル教育を考える上で言語の組み合わせを考慮することは重要である。近年日本では外国人労働者の受け入れや国際結婚などにより多様な文化的・言語的背景を持つ児童が増加し、彼らの学習を保障するための日本語教育や、母語を維持するための母語教育への関心が高まっている。中島が朝鮮学校の教育について「日本最大規模の継承語教育実践として、これからの海外の日系社会の活性化や国内の外国人児童・生徒の言語教育の在り方を考える上で、貴重なデータと示唆を与えるもの」（中島, 2010, pp. ii - iii）と述べたように、朝鮮学校の教育事例は多様な言語教育の必要性の面からも注目に値する。

朝鮮語と日本語には文法的な類似点が多い。まず、朝鮮語の語順は日本語と同じく SOV 型であり、修飾語は被修飾語の前に来る。また、両言語ともに自立語の語幹に助詞や接辞等の付属語を付けて語や文を形成する膠着語の性質を持つ。類似点の過剰な般用による誤用もしばしば見られるが、日本語を前から順に朝鮮語に置き換えることでほとんど意味が通じる文となり、文法的な誤りが少ない（例: 나 / 는 [私 / は] 방 / 에서 [部屋 / で] 책 / 을 [本 / を] 읽 / 어요 [読み / ます]（「/」は自立語と付属語の境界を示す））。これは朝鮮語と日本語で「何かを語ったり、考えたりする順序が、同じような順序になる」（野間, 2014, p.23）ことを意味する。学習者の第一言語と目標言語が似ているほど全体として学習しやすいとされており、例えば英語話者にとってはスペイン語よりも日本語の習得が難しい（白井, 2008）。つまり第二言語習得においては、第一言語と目標言語の組み合わせが習得過程に影響を及ぼす。文法的な類似点が多い朝鮮語と日本語の組み合わせでは、英語と日本語のような他の言語同士の組み合わせとは異なる習得過程があることが想定される。

1.3 研究の目的および構成

本研究は、朝鮮学校児童の発話について言語課題を用いて定量的に分析することで、習得初期段階における朝鮮語習得過程について調べることを目的とする。本研究は特に語彙の増加に焦点を当て、自立語および付属語語彙の増加傾向から朝鮮語習得を検討する。

まず、調査1として1～3学年児童を対象とした横断研究を行い、調査2として2学年児童を対象とした縦断研究を行う。各調査ではストーリーテリング課題を用いて発話データを収集した。異なり語数の分析とともに、日本語を含む全体の発話のうち朝鮮語が占める比率を求めることで、児童が朝鮮語を話すようになる過程に着目する。付属語については、産出された付属語の異なり語数と使用者率を分析することで、付属語の習得過程とどのような付属語の習得が早いのかを検討する。以下の章では、2章で調査1について、3章で調査2について述べた後、4章で2つの調査を合わせた考察を行う。

2. 調査1

1～3学年における朝鮮語習得過程を横断的に調べるために、ストーリーテリングを用いて児童の発話を収集した。ストーリーテリングとは、文字のない絵本やイラストを見てその内容を自由に話す

課題で、様々な言語発達研究に用いられる手法である。文字のない絵本“Frog, Where Are You?” (Mayer, 1969) を使用した研究が数多く行われている。児童たちの発話を定量的に分析することを目的とした本研究では、統制された環境で発話データを収集するためにストーリーテリングの方法を用いた。またこの方法により、課題に取り組む時間が限られる学校環境で、児童たちの発話を効率的に収集することができた。

2.1 調査時期および参加者

2023 年 3 月 (3 学期) に調査を実施した。東京都内の朝鮮初級学校 (A 校) に在籍する 1 学年 13 名 (男児 9 名, 女児 4 名, 平均年齢 = 7.5 歳, 範囲 = 6 歳 11 ヶ月 - 7 歳 11 ヶ月)、2 学年 9 名 (男児 4 名, 女児 5 名, 平均年齢 = 8.4 歳, 範囲 = 8 歳 3 ヶ月 - 8 歳 7 ヶ月)、3 学年 9 名 (男児 6 名・女児 3 名, 平均年齢 = 9.3 歳, 範囲 = 9 歳 0 ヶ月 - 9 歳 9 ヶ月) の合計 31 名と、同じく東京都内の朝鮮初級学校 (B 校) に在籍する 1 学年 4 名 (女児 4 名, 平均年齢 = 7.5 歳, 範囲 = 7 歳 1 ヶ月 - 7 歳 11 ヶ月)、2 学年 9 名 (女児 9 名 平均年齢 = 8.4 歳, 範囲 = 8 歳 0 ヶ月 - 8 歳 10 ヶ月)、3 学年 3 名 (男児 1 名・女児 2 名, 平均年齢 = 9.7 歳, 範囲 = 9 歳 8 ヶ月 - 9 歳 10 ヶ月) の合計 16 名が参加した。

朝鮮学校には初級学校のみ、附属幼稚班がある学校、中級学校や高級学校が併設された学校などさまざまなタイプがある。A 校は初級学校のみ単独で設立された学校であり、B 校は幼稚班・初級学校・中級学校が併設された学校である。したがって、A 校の児童は初級学校入学後に初めて体系的な朝鮮語教育を受けるのに対し、B 校児童の多くは初級学校就学前に一定の朝鮮語教育を受けている。この違いが初級学校段階における朝鮮語習得に影響する可能性があるため、本研究ではタイプの異なる 2 校に協力してもらい比較を行った。なお、B 校参加者の 16 名中 13 名が附属幼稚班出身であった。

2.2 調査材料および手続き

2.2.1 PVT-R 絵画語い発達検査

第一言語である日本語語彙の理解力を確認するために、PVT-R 絵画語い発達検査 (上野他, 2008) (以下、PVT-R) を行った。PVT-R では、個人の成績が同一年齢水準のどのあたりに位置するのかを表す評価点が算出される。評価点は 1 ~ 19 の範囲で表されるため平均は 10 となり、数値が高いほど語彙の理解力が高いことを示す。

2.2.2 ストーリーテリング

絵本「ちいちゃんときのぼり」(しみずみちを, 2003, ほるぷ出版) を使用し、日本語を第一言語とする日本語と朝鮮語のバイリンガルである第一著者が実施した。文字を消して見開き 1 ページで 1 枚のイラストとなるように編集した絵本は、表紙を除いて 13 枚で構成された。参加者はノートパソコン (MacBook Air 2020, 13.3 インチ) 上で絵本を閲覧した。参加者に絵本を見ながら内容を自由に話すよう指示を与え、朝鮮語で話しながら分からない言葉は日本語で話しても良いことを伝えた。まず 1 枚目から最後まで 1 枚あたり 3 秒ほど目を通した後、1 枚目から内容を話してもらった。ページは参加者が自らのタイミングでめくるようにし、制限時間は設けなかった。発話が止まった際には、《뭘

하고있어요?》(何しているのかな?)などと質問して発話を促したが、特定の人物や行動に触れる具体的な発言は避けた。絵本について話す様子をデジタルビデオカメラ (SONY, HDR-AS50R) で録画および録音し、これを書き起こした発話データを分析に使用した。

2.3 分析方法

語数を数える際は自立語を数え付属語は個別に数えなかった。語数の数え方についての詳細は参考資料 1 に記した。朝鮮語の産出量の指標として朝鮮語自立語の延べ語数 (以下、朝鮮語産出量)、朝鮮語の語彙数の指標として朝鮮語自立語の異なり語数 (以下、朝鮮語語彙数) を算出した。また、朝鮮語産出量を朝鮮語自立語と日本語自立語の延べ語数を合わせた数で割った朝鮮語比率を算出した。付属語の分析には、産出された朝鮮語付属語の異なり語数 (以下、付属語数) と使用者率を用いた。朝鮮語の付属語には、同じ機能を持つがその前に来る単語の構造によって異なる形態が使用される付属語がある。例えば、[-가 (ka)] と [-이 (i)] は同じ機能を持つ異形態の付属語対であり、前者は母音で終わる語に、後者は子音で終わる語に付く。本稿では異形態を「/」で区切って記し、これらの異形態は 1 種類の付属語として扱った。複数の付属語が連続して使用された場合には、それぞれを個別に数えた (例: 먹 [엇] [습니다] (食べました))。使用者率とは、ある付属語を使用した人数を全体人数で割った値である。使用されたすべての付属語の使用者率を学年および調査月ごとに算出した。

本研究の従属変数はカウントデータおよび割合データであり、その誤差構造は正規分布を仮定しないため、一般化線形混合モデルによる分析を行った。統計分析には統計ソフト R (Version 4.4.1) (R Core Team, 2023) の coin、lme4 および emmeans パッケージを用いた。

2.4. 倫理的配慮

本研究は、日本女子大学の倫理審査委員会での承認を得て行われた (承認番号第 528 号)。調査を行った朝鮮初級学校 2 校の校長および教務主任に研究目的と内容を説明し、学校での調査実施について許諾を得た。担任を介して説明書および同意書を家庭に配布し、児童の調査への参加および収集したデータの開示範囲について保護者の同意を得た。

2.5 結果

2.5.1 PVT-R 絵画語い発達検査

平均評価点は 11.96 ($n = 47$, $SD = 3.18$) であり、学年別に平均評価点を算出すると 1 学年 11.59 ($n = 17$, $SD = 3.22$)、2 学年 12.94 ($n = 18$, $SD = 3.02$)、3 学年 11.00 ($n = 12$, $SD = 3.19$) となった。この結果から、朝鮮学校に通う児童が同一年齢の日本語母語児と同等程度の日本語語彙の理解力を持つことが示された。

2.5.2 朝鮮語比率と朝鮮語語彙数

朝鮮語産出量・朝鮮語語彙数・朝鮮語比率について、学校 (A 校・B 校) と学年 (1・2・3 学年) を固定効果、参加者を変量効果とした一般化線形混合モデルによる検討と Bonferroni 法で補整した多重比較を行った。朝鮮語産出量・朝鮮語語彙数はポワソン分布を仮定し対数リンク関数を、朝鮮語

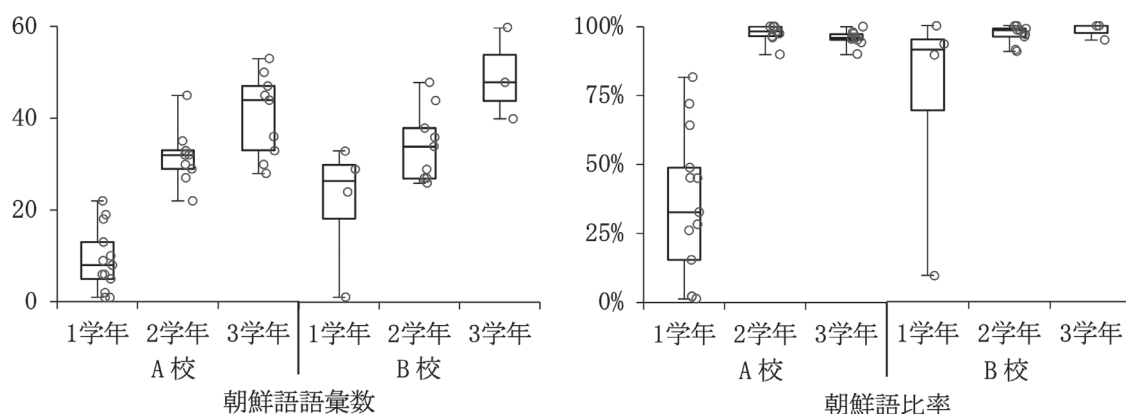


図1 学校および学年ごとの朝鮮語語彙数と朝鮮語比率を示した箱ひげ図 (○=個人のデータ)

比率は二項分布を仮定しロジットリンク関数を用いた。

その結果、朝鮮語産出量については1学年に比べ2学年 (Estimate = 1.19, $z = 5.67$, $p < .001$)、3学年 (Estimate = 1.49, $z = 6.58$, $p < .001$) で増加した。朝鮮語語彙数も、1学年に比べて2学年 (Estimate = 1.05, $z = 6.69$, $p < .001$)、3学年 (Estimate = 1.39, $z = 8.31$, $p < .001$) で増加した。朝鮮語比率も、1学年に比べて2学年 (Estimate = 4.25, $z = 6.78$, $p < .001$)、3学年 (Estimate = 4.20, $z = 6.41$, $p < .001$) で比率が高かった。2学年と3学年間にはどの項目においても変化は示されなかった。学校間については、朝鮮語産出量 (Estimate = 0.41, $z = 2.22$, $p < .05$)、朝鮮語語彙数 (Estimate = 0.31, $z = 2.31$, $p < .05$)、朝鮮語比率 (Estimate = 1.18, $z = 2.03$, $p < .05$) すべてで統計的に有意な差が見られ、いずれもB校の値が高かった。

2.5.3 付属語の習得

表1にA校およびB校児童の個人が使用した付属語数の中央値と、使用者率が1%・24%・25%・49%・50%・74%・75%・100%に含まれる付属語の数を学年ごとに示した。付属語数について、学校(A校・B校)と学年(1・2・3学年)を固定効果、参加者を変量効果とし、ポワソン分布を仮定して対数リンク関数を用いた一般化線形混合モデルによる検討とBonferroni法で補整した多重比較を行った。その結果、1学年と比較して2学年 (Estimate = 0.87, $z = 4.97$, $p < .001$)、3学年 (Estimate = 1.06, $z = 5.66$, $p < .001$) で付属語の使用が増加した。なお、学校間に違いは見られなかった。また、各付属語の使用者率を算出し付属語の習得状況を分析した。A校は使用者率が50%を超える付属語(表1の50～74%と75～100%を合わせた数)が1学年は2種類、2学年は18種類、3学年は20種類であった。B校は、使用者率が50%以上の付属語が1学年は18種類、2学年は14種類、3学年は20種類であった。

表1 付属語数（中央値）と使用者率の範囲別に数えた付属語の数

学校	学年	付属語数（四分位範囲）	各使用者率の範囲に含まれる付属語数			
			1～24%	25～49%	50～74%	75～100%
A 校	1	8.0 (1.0-11.0)	19	9	2	0
	2	20.0 (17.0-24.0)	18	9	9	9
	3	22.0 (20.0-25.0)	18	8	8	12
B 校	1	17.5 (12.0-20.3)	0	13	8	10
	2	17.0 (17.0-24.0)	18	9	5	9
	3	25.0 (21.0-25.5)	0	13	7	13

3. 調査2

3.1 調査時期および参加者

調査1に引き続きA校で縦断研究を行った。調査1当時に1学年であった2学年児童14名（男児10名、女児4名、5月当時の平均年齢＝7.8歳、範囲＝7歳2ヶ月－8歳1ヶ月）が参加した。13名は調査1の参加者であったが、1名は6月の調査から加わった。2023年5月・6月・7月・9月に調査を実施した。

3.2 調査材料および手続き

調査1と同様にストーリーテリングを行った。同じ絵本を使用することで絵本の内容に対する学習効果によって語数が増える可能性を考慮し、毎月異なる絵本を使用した。なお、各調査において内容の複雑さやイラストの雰囲気などに差が生じないように、調査1と同じ「ちいちゃんえほん」シリーズ（しみずみちを，ほるぷ出版，全12巻）の中から絵本を選んだ。各絵本のページ数は13～15枚で大きな差はなかった。節分やお月見など日本の文化特有の内容が含まれる絵本は、日本語の発話を促す可能性があるため使用しなかった。文字を消すなど調査1と同じ編集を行った。調査手続きは調査1と同様であった。

3.3 分析方法

調査1と同様の分析方法を用いた。調査2の参加者は1名を除いた全員が2023年3月に実施した調査1に参加したため、分析には調査1の結果も含む5回分（3月・5月・6月・7月・9月）のデータを使用した。なお、5月は1名、6月は3名、7月は1名が欠席等により調査に参加しなかった。

3.4 結果と考察

3.4.1 朝鮮語比率と朝鮮語語彙数

朝鮮語産出量・朝鮮語語彙数・朝鮮語比率について、調査月（3・5・6・7・9月）を固定効果、参加者を変量効果とした一般化線形混合モデルによる検討とBonferroni法で補整した多重比較を行っ

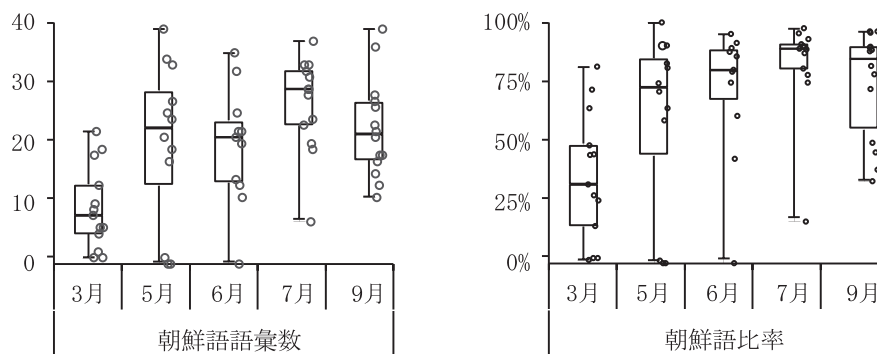


図2 調査月ごとの朝鮮語語彙数と朝鮮語比率を示した箱ひげ図 (○=個人のデータ)

た。朝鮮語産出量・朝鮮語語彙数はポワソン分布を仮定し対数リンク関数を、朝鮮語比率は二項分布を仮定しロジットリンク関数を用いた。

その結果、朝鮮語産出量については3月と比較して5月 (Estimate = 0.76, $z = 11.61$, $p < .001$)、6月 (Estimate = 0.58, $z = 9.70$, $p < .001$)、7月 (Estimate = 0.87, $z = 13.94$, $p < .001$)、9月 (Estimate = 0.53, $z = 9.15$, $p < .001$) のすべての月で増加した。5月は6月 (Estimate = 0.18, $z = 2.94$, $p < .05$) および9月よりも (Estimate = 0.22, $z = 3.90$, $p < .01$)、また、7月は6月 (Estimate = 0.29, $z = 5.20$, $p < .001$) および9月 (Estimate = 0.34, $z = 6.33$, $p < .001$) よりも朝鮮語産出量が多かった。朝鮮語語彙数も、3月に比べ5月 (Estimate = 0.60, $z = 6.29$, $p < .001$)、6月 (Estimate = 0.52, $z = 6.15$, $p < .001$)、7月 (Estimate = 0.85, $z = 9.60$, $p < .001$)、および9月 (Estimate = 0.60, $z = 7.42$, $p < .001$) すべてで増加した。また、7月は5月 (Estimate = 0.25, $z = 2.91$, $p < .05$)、6月 (Estimate = 0.33, $z = 4.10$, $p < .001$)、9月 (Estimate = 0.25, $z = 3.37$, $p < .01$) よりも語彙数が多かった。朝鮮語比率は、3月に比べ5月 (Estimate = 1.37, $z = 11.97$, $p < .001$)、6月 (Estimate = 2.01, $z = 15.55$, $p < .001$)、7月 (Estimate = 2.95, $z = 20.74$, $p < .001$)、9月 (Estimate = 2.06, $z = 16.77$, $p < .001$) のすべてで、また5月に比べて6月 (Estimate = 0.63, $z = 4.92$, $p < .001$)、7月 (Estimate = 1.58, $z = 11.50$, $p < .001$)、および9月 (Estimate = 0.69, $z = 5.75$, $p < .001$) で比率が高かった。また、7月は6月 (Estimate = 0.95, $z = 6.37$, $p < .001$) および9月よりも (Estimate = 0.89, $z = 6.32$, $p < .001$) 比率が高かった。

3.4.2 付属語の習得

表2に個人が使用した付属語数の中央値と各使用者率に含まれる付属語の数を調査月ごとに示した。付属語数について、調査月 (3・5・6・7・9月) を固定効果、参加者を変量効果とし、ポワソン分布を仮定し対数リンク関数を用いた一般化線形混合モデルによる検討と Bonferroni 法で補整した多重比較を行った。3月に比べて5月 (Estimate = 0.39, $z = 3.25$, $p < .05$)、6月 (Estimate = 0.47, $z = 4.33$, $p < .001$)、7月 (Estimate = 0.66, $z = 6.02$, $p < .001$)、および9月 (Estimate = 0.50, $z = 4.86$, $p < .001$) で付属語が増加した。また、使用者率が50%を超える付属語 (表2の50～74%と75～100%を合わせた数) が、3月は2種類だったのに対し、5月と6月は11種類、7月は15種類、9月は12種類に増えた。

表2 調査月ごとの付属語数（中央値）と使用者率の範囲別に数えた付属語の数

付属語数（四分位範囲）		各使用者率の範囲に含まれる付属語数			
		1 ～ 24%	25 ～ 49%	50 ～ 74%	75 ～ 100%
3 月	8.0 (1.0-11.0)	19	9	2	0
5 月	13.0 (8.3-16.8)	17	10	8	3
6 月	15.0 (11.0-18.0)	12	10	6	5
7 月	18.0 (12.0-20.0)	20	7	6	9
9 月	13.0 (12.3-13.8)	24	7	9	3

4. 考察

4.1 朝鮮学校児童の朝鮮語比率と朝鮮語語彙数

調査1ではA校とB校ともに2学年と3学年の朝鮮語比率の中央値が95%を超えていることから、就学後2年間で、文章のほとんどを朝鮮語が占めるほどに習得したことが窺える。調査時期が3学期の3月中旬であったことを踏まえると、児童らは2学年後半から3学年ごろまでに、学校生活全般を朝鮮語で過ごすことができるようになって考えられる。2学年と3学年は朝鮮語産出量、朝鮮語語彙数、朝鮮語比率のすべてにおいて1学年よりも値が高く、朝鮮語習得が進んでいることが示唆された一方で、2学年と3学年の間には、いずれの項目においても変化は示されなかった。今回の調査では幼児向けの平易な絵本についての短い発話を分析対象としたことから、必要な語彙数が多くない等の理由で2・3学年児童の間に差が見られなかった可能性がある。また調査1では異なる学年を横断的に比較したため、実際の習得過程ではなく横断データを基に類推したものである点にも限界がある。2学年以降の習得過程については、縦断研究やより長い発話データを収集するなど、異なる方法での調査を行った上で改めて分析する必要がある。一方、A校とB校の間で朝鮮語産出量、朝鮮語語彙数、朝鮮語比率に統計的に有意な差が見られ、B校のほうが高かった。B校には附属幼稚班が併設され、初級学校就学前に朝鮮語教育を開始している。よって、朝鮮語学習を開始する年齢の早さが低学年、特に学校間での差が大きい1学年（図1参照）の朝鮮語能力に関与した可能性が考えられる。一方で、本研究では対象としていない高学年以降における就学前教育の影響については、さらなる研究の余地がある。また、就学前教育の有無だけでなく、学級人数や学校の教育方針の違いが朝鮮語の習得過程に影響を及ぼしている可能性もあり、この点も今後の検討課題である。

縦断研究を行った調査2では、朝鮮語比率の中央値が1学年の3月中旬の32.7%から、5月に73.1%、さらに7月には89.3%まで上昇し、約4ヶ月で55%以上の上昇が観察された。このことから、A校児童の学校内での朝鮮語比率は、1学年後半から2学年の前半の間に急速に上昇したと考えられる。また、3月に比べて5月で2倍以上、7月に3倍以上の朝鮮語語彙が産出され、数ヶ月の間に朝鮮語語彙が大幅に増える過程が示された。しかし、9月になると朝鮮語語彙数と朝鮮語比率が7月よりも低下した。夏休み明けである9月は「夏休みの間に朝鮮語を使用する機会が減ることで、日本語が増える」とよく言われる時期であり、A校の結果にも同様の現象が生じたと考えられる。

4.2 付属語の習得

1 学年よりも 2・3 学年が多様な朝鮮語付属語を使用した一方で、2 学年と 3 学年の間には変化がなかったことから、付属語は基本的な文が産出可能になるとその後の習得は緩やかになる可能性が横断データから示唆された。また、自立語語彙の分析では学校間に統計的に有意な差が示された一方で、付属語では学校間に差は見られなかった。したがって、幼稚班から朝鮮語学習を開始することの影響は、付属語より自立語の語彙数増加に現れるのではないだろうか。その背景として、幼稚班での朝鮮語の経験が主に自立語語彙に触れることにあり、結果的に付属語のような文法的要素には影響が及ばない可能性が考えられる。この点については、今後さらなる実証的な研究が必要となる。

早期に習得されやすい付属語を明らかにするために、日本人幼児の助動詞と助詞の発達について研究した綿巻（2016）に倣い、使用者率を分析した。綿巻（2016）は、使用者率が 50% に到達した月齢をその助詞および助動詞の習得月齢とみなして報告した。これに倣い、使用者率 50% 以上の付属語を当該学年および調査月において習得された付属語であると捉えて分析した。1 学年 3 月に使用者率が 50%、もしくは 2 学年 5 月に 75% を超えた付属語を I 群、2 学年 5 月に使用者率が 50% を超えた付属語を II 群として選出したところ、11 種類の付属語（I 群 4 種類・II 群 7 種類）が該当した（表 3）。

I 群の付属語は朝鮮語学習者を対象とした研究において、他の付属語に比べ使用頻度が非常に多く習熟度が高い付属語として挙げられている（Lee et al., 2019; Ogino, 2017; 斉藤・小島, 2018）。Lee et al. (2019) はこれらの付属語を「文構成の必須成分」または「文構成の必須成分と関連する」とし、学習者は文の構成で求められる付属語をまず習得すると指摘した。II 群に属する過去の時制を表す付属語や助動詞についても、習得が早い理由を「文構成の必須成分である」という視点から解釈することが可能であろう。

表3 早期から使用者率が高かった付属語

I 群		II 群	
付属語	対応する日本語	付属語	対応する日本語
[- 가 / 이]	が（格助詞）	[- 았 / 었 / 였]	過去形を作る ^{a)}
[- 는 / 은]	は（副助詞）	[- 아요 / 어요 / 여요]	ます（助動詞）
[- 를 / 을]	を（格助詞）	[- 아서 / 어서 / 여서]	て（接続助詞）
[- 에]	に・へ（格助詞）	[- 와]	と（格助詞）
		[- 고]	て（接続助詞）
		[- 라고 / 다고]	と（格助詞）
		[- 로 / 으로]	で（格助詞）

注 東京外国語大学言語モジュール（TUFs 言語モジュール, 2015）を参考に代表的な訳を記載。

注^{a)} [- 았 / 었 / 였] は接続助詞や助動詞の前について過去形を作る。

5. 課題および今後の展望

今後の課題としてはまず、より日常的な生活場面の言語使用についての検討があげられる。本研究は短いストーリーテリングによって収集した調査状況下での発話データを使用したため産出された言葉に限られている。より実態に即した言語発達過程を捉えるためには、学校での友達や教師などさまざまな聞き手との自然な日常会話における朝鮮語使用状況を分析する必要がある。また、誤用分析も朝鮮語習得を明らかにする上で重要である。本研究では、付属語の使用において、異形態の使い分けの誤りや日本語と過剰に対応させたことによる誤用が観察された。このような誤用の例を Meng (2021) が報告しているが、後者については日本語の干渉や借用による「在日朝鮮語」であるとの見方もある (朴, 2007; 趙, 2007)。誤用について詳細に分析することで、朝鮮学校児童が話す朝鮮語の特徴をより具体的に明かし、日本語の転移に関する知見も得られるだろう。最後に、本論文で得た結果は限られた調査対象についての結果であるため、より広範な朝鮮学校に対する調査が必要である。全国各地の朝鮮学校にはさまざまなタイプがあり学級人数の幅も広い。本研究では A 校と B 校の比較を試みたが、参加人数の少なさなどにより課題成績の差の要因を詳しく検討するには至らなかった。こうしたタイプの違いが朝鮮語習得過程に与える影響や、今回対象としなかった初級部入学以前、および初級部 4 学年以降の発達についても今後の研究の蓄積が期待される。

付記

本研究の調査にご協力いただきました児童と保護者の皆様、朝鮮学校の先生方に心より感謝申し上げます。本論文は第一著者が令和 5 年度に日本女子大学人間社会研究科へ提出した修士論文の一部を加筆、修正したものである。なお、ストーリーテリングの前に朝鮮語音素の弁別を検討するために音声知覚実験を行った。音声知覚実験は本研究とは異なる目的で行われたものであり、その詳細は別に報告する予定である。

注

- 1) 日本では韓国語と称されることも多いが、学術的には当該言語を使用する地域の総称として朝鮮語という呼称を用いるのが一般的である。また、先行研究において韓国語という言葉名称が用いられた場合にも、本論文においては朝鮮語に統一して記載した。

引用文献

- 上野一彦・名越斉子・小貫悟 (2008)『PVT-R 絵画語い発達検査』日本文化科学社
- 江口朗子 (2020)「模倣発話課題と文法性判断課題による小学 5 年生の英語の統語構造に関する知識の測定：結果に影響を与える要因分析」『小学校英語教育学会誌』20 (1), 304-319. https://doi.org/10.20597/jesjournal.20.01_304
- 金美善 (2009)「変わる移民政策：朝鮮総連系民族学校のバイリンガル教育」『国立民族学博物館調査報告』83, 299-315.
- 斉藤信浩・小島大輝 (2018)「韓国語学習者の初級韓国語助詞の習熟度について」『朝鮮語教育：理論と実践』13, 77-90.
- 笠原究・町田なほみ・長田恵理・高梨庸雄・吉澤小百合 (2012)「小学校 5, 6 年生の語彙知識：音声、意味、文字の結びつきに関して」『小学校英語教育学会誌』12, 90-101. https://doi.org/10.20597/jesjournal.12.0_90
- しみずみちを (1983)『ちいちゃんとかわあそび』ほるぷ出版
- しみずみちを (1983)『ちいちゃんとさんりんしゃ』ほるぷ出版

- しみずみちを (1983)『ちいちゃんとゆきだるま』ほるぷ出版
- しみずみちを (2003)『ちいちゃんときのぼり』ほるぷ出版
- しみずみちを (2003)『ちいちゃんのはいしゃさん』ほるぷ出版
- 白井恭弘 (2008)『外国語学習の科学—第二言語習得論とは何か』岩波書店
- 宋実成 (2006)「朝鮮学校児童らの朝鮮語使用 - 談話文字化資料から見た文法諸形式の使用状況について -」『移民コミュニティの言語の社会言語学的研究 研究成果報告書 (2) 日本在住コリアンの言語』
- 趙義成 (2007)「在日朝鮮語」『趙義成の朝鮮語研究室』〈<https://www.tufsacjp.ts/personal/choes/bibimbab/zainitigo/index.html>〉(2024 年 7 月 27 日 10 時 15 分)
- TUFS 言語モジュール(東京外国語大学 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」)(2015)〈<https://www.coelangtufsacjp/mt/>〉(2024 年 7 月 27 日 10 時 30 分)
- 中島和子 (2006)「学校教育の中でバイリンガル読書力を育てる :New International School における DRA-J 読書力テストの開発を通して」『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究』2, 1-31.
- 中島和子 (2010)「ブレ創刊号復刻版の発行に寄せて」『母語・継承語・バイリンガル教育(WHB)研究』ブレ創刊号, i - iv.
- 野間秀樹 (2014)『韓国語をいかに学ぶか: 日本語話者のために』平凡社
- 長谷川修治 (2013)「小学校英語の開始学年と指導形態の及ぼす効果: 熟達度テストと意識調査による比較検証」『小学校英語教育学会誌』13, 163-178. https://doi.org/10.20597/jesjournal.13.0_163
- 本田勝久・田所貴大・星加真実・染谷藤重 (2020)「小学校英語における研究動向 :JES Journal のシステムティックレビュー」『小学校英語教育学会誌』20 (1), 351-366. https://doi.org/10.20597/jesjournal.20.01_351
- 朴浩烈 (2007)「在日朝鮮語の研究: 言語分析・社会言語学的考察への試み」『韓国語学年報』3, 93-124.
- 宮田 Susanne (2012)「日本語 MLU (平均発話長) のガイドライン: 自立語 MLU および形態素 MLU の計算法」『健康医療科学研究』2, 1-17.
- 山口陽弘・清水真紀・土方裕子・今井信一 (2013)「イマージョン教育を受ける日本人中学生の音韻的作動記憶に関する研究: 非単語復唱能力の観点から」『群馬大学教育実践研究』30, 199-209.
- 湯川笑子 (2003)「京都市の朝鮮学校における朝鮮語・日本語バイリンガル教育の方法と成果」『平成 13 年度～平成 14 年度科学研究費補助金 [基盤研究 (C) (2)] 研究成果報告書 (課題番号 13680363) 』
- 湯本和子 (2003)「カナダのバイリンガル教育・日本のバイリンガル教育: イマージョン・プログラムの概略と評価」『神奈川県立外語短期大学紀要 総合編』26, 1-29.
- 李瑞希 (2024)「朝鮮幼稚園に通う日本語母語児の朝鮮語音素弁別-映像教材を活用した音声学習の効果と関連する要因の検討」『白梅学園大学大学院子ども学研究科修士論文 (未公開) 』
- 柳美佐 (2009)「朝鮮学校における小学 1 年生への L2 朝鮮語指導の特徴」『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究』5, 22-41.
- 綿巻徹 (2016)「文法の発達」小椋たみ子・綿巻徹・稲葉太一著『日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙の開発と研究』(pp. 139-182) ナカニシヤ出版
- Mayer, M. (1969). *Frog, where are you?* New York: Dial Press.
- R Core Team. (2023). R: A language and environment for statistical computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. <<https://www.R-project.org/>>
- Kim, Y. (김영태)(1997). 한국 2-4 세 아동의 발화길이에 관한 기초연구 . *말 - 언어장애연구*, 2(1), 5-26. [韓国 2-4 歳児の発話長に関する基礎研究]
- Lee, S., Lee, Y., Choi, E., & Lee, S. (이승연, 이유경, 최은지, 이선영)(2019). 초급 한국어 학습자의 조사 습득 및 발달 연구 . *언어사실과 관점*, 48, 505-541. [初級韓国語学習者の助詞の習得および発達研究]
- Meng, P. (맹복실)(2021). 조선대학교 학생들의 글말본문에 나타난 조선말 이음토에 대한 연구 (1). *朝鮮大学校學報*, 31, 39-55. [朝鮮大学校学生の書き言葉本文に表れた朝鮮語接続形についての研究 (1)]
- Ogino, S. (오기노신사쿠)(2017). 일본인 학습자 대상의 한국어 조사 사용 및 오류 양상 연구 . *언어와 문화*, 13(4), 117-140. <https://doi.org/10.18842/klaces.2017.13.4.005> [日本人学習者対象の韓国語助詞使用および誤謬様相に関する研究]

参考資料 1

語数のカウント方法	例
1) 自立語 MLU（平均発話長）を計算する際に用いるカウント方法で数えた。自立語 MLU では付属語は個別にカウントされない。 日本語の場合、自立語には動詞・名詞・形容詞・形容動詞・副詞・連体詞・接続詞・感動詞が含まれる。朝鮮語の場合、動詞・名詞・代名詞・数詞・形容詞・副詞・冠形詞・感嘆詞・助詞が含まれる。 日本語の感動詞と朝鮮語の感嘆詞はカウントの対象から除いた。	木に / 登った → 2 語
2) 日本語分析は宮田（2012）を、朝鮮語分析は Kim(1997) を参考にした。	
3) 朝鮮学校の学習内容の基となる文法が、韓国の学校文法と一部異なるため、朝鮮学校の教科書を制作している学友書房の文法教科書と朝鮮語辞典を参照し、カウント方法を以下のように調節した。 ①韓国の学校文法では助詞が 9 品詞中の 1 つであるため Kim(1997) は助詞を個別にカウントしている。しかし、学友書房および朝鮮学校が従う文法規則では助詞と語尾を含めた「토 (ト)」を付属語として扱うこと、また日本語では助詞を自立語としてカウントしないことから、本研究では朝鮮語助詞は自立語としてカウントしなかった。 ②複合語は、朝鮮語辞典（学友書房）の見出し語として記載されているかどうかをカウントの基準とした。	②複合語 달려 / 가다 (走って行く) →見出し語有り =2 語 돌아 / 가다 (帰る) →見出し語無し =1 語
4) 「動作名詞+する」について宮田（2012）と Kim(1997) でカウント方法が異なるため、Kim(1997) に合わせて 1 語としてカウントした。コードスイッチングが起こっている場合も 1 語としてカウントした。	・完成する ・加工하다 (加工する) ・도전하다 (挑戦する) →全て 1 語
5) 助数詞は、Kim(1997) に合わせて数字と分けてカウントした。	2/ 개 (2/ 個) → 2 語